

# 戦國文字と傳世文獻に見える「文字異形」について

——「百」字を例として——

曹 方 向

## はじめに

戦國文字の「異形」の現象は、主に文字形體と用字習慣（文字の使い方の習慣）の差異を表しており、これは出土戦國文獻中に多くの例證がある。文字形體の差異については、例えば「目」は、齊系文字では「𠄎・𠄏」と書かれ、齊と三晉文字ではまた「𠄎・𠄏」と書かれるが、楚系文字では「𠄎」と書かれている。用字習慣の差異については、例えば「厨」は、秦系文字では「厨」、三晉文字では「朱」と書かれ、楚系文字では「𠄎」と書かれている<sup>1)</sup>。

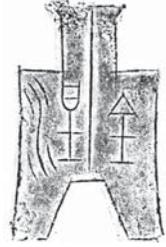
秦代は、秦の文字とは合わない六國古文を廢除したため、文字の「異形」の現象は大きく變化した。しかし、このようであっても、古文の字形が短期間のうちに完全に撤廢されることは難しい。しかも秦朝が存続した期間是非常に短く、そのため秦代から前漢初期までに編纂・抄寫された書籍の中にはすべて六國古文が見える。古文を廢除する前に編纂・抄寫された書籍の中には、當然、六國古文が使用されている。実際に、その中には漢代の學者が言うところの「古文經」が少な

からず存在している<sup>3)</sup>。現在、戦國文字を用いて古典文獻を新たに釋讀した研究成果は數多くあり、筆者もかつて三晉文字の中の「百」字の特殊な寫法について検討を試みたことがある。本論では、新たに發表された資料をもとに、關連する問題について再度検討していきたい。

## 第一章 「全1」と書かれる「百」字について

戦國文字の「百」は、甲骨文字や西周金文の寫法を踏襲していると同時に、一種の特殊な字形も出現しており、それは秦漢以來の「全」字の寫法と非常に似ている<sup>4)</sup>。以下、便宜上、この種の「百」の新字形を「全1」と表示する。現在までのところ、「全1」は主に戦國時代の貨幣文字、特に三晉（趙・魏・韓）の貨幣銘文の中によく見られる（以下、『中國歷代貨幣大系1（先秦貨幣）』（汪慶正主編・馬承源審校、上海人民出版社、一九八八年）を『貨系』と畧す）。

(1) 『貨系』 1222



(2) 『貨系』 1348



(3) 『貨系』 1355



例えば(1)は、いわゆる「鋭角布」であり、一般的に戦国早期から中期までに韓が使用した貨幣であると認識されている。その銘文の内容は依然として確定していないが、通常は「百涅」と釋讀されている。例(2)と(3)は、いずれもいわゆる「橋形布」であり、一般的に戦国中晩期に魏が使用した貨幣であると認識されている。(2)の銘文は通常、「梁重鉞百當守」あるいは「梁亢鉞百當守」と、(3)は「梁正幣百當守」あるいは「梁整幣百當守」と釋讀されている。冒頭の「梁」は、梁の恵王の遷都以後の魏の都城を指し、「大梁」とも稱される。いわゆる「百」はすべて「全1」と書かれている。

王毓銓氏や林巳奈夫氏らが(2)・(3)のような貨幣の實際の重さを測り、その銘文に見える「鉞」と「守」の關係について研究した際、「全1當守」(全1枚は一寸に當たる)の貨幣はおおよそ「五十當守」(五十枚は一寸に當たる)の貨幣の重さの半分であることを發見した。そして林氏は、「全1」は「百」の意味であると明確に指摘した。當時の習慣によって、林氏は「全1」を「金」と釋讀している。「金」には「百」の意味がないことから、林氏は「金」は別の何かの文字の通假字ではないかと疑っている<sup>5)</sup>。これは初めて戦国文字の「全1」

に「百」の意味があることを明確に示したものである。一九七九年、河北省平山中山王銅器銘文が發表された際、さらに一步進んで、「全1」自體に「百」の意味があることが確定した<sup>6)</sup>。

「全1」の字形については、多くの異なる解釋がある。例えば、李學勤氏は「害」の省畧體であるとし、張政烺氏は「百」が倒れて書かれたものであるとし、湯餘惠氏は「白」の繁體の異體字であると見なしている<sup>7)</sup>。現在までのところ、「全1」の字形の構成と來源については定説がないが、「全1」が「百」の意味を示していることはすでに共通認識となっている。

出土文字資料について見ると、戦国時代に、三晉などの地ではこの「全1」の字形が使用され続けている。この字形は貨幣文字に出現しているだけでなく、長篇の文章(中山王銅器銘文)の中にも出現している。このほか、筆者は以前、傳世文獻中の疑似用例について検討したことがある。

## 第二章 傳世文獻に見える「全1」の疑似用例につ

### つ

『呂氏春秋』慎勢に「湯其無鄣、武其無岐、賢雖十全、不能成功。湯・武之賢而猶藉乎勢、又況不及湯・武者乎(湯其れ鄣無く、武其れ岐無くんば、賢十全と雖も、功を成すこと能わざらん。湯・武の賢にして猶ほ勢に藉る、又た況んや湯・武に及ばざる者をや)。」と、その高誘注に「鄣・岐、湯・武之本國。假令無之、賢雖十倍、不能以成功業(鄣・岐は、湯・武の本國なり。假令之無きも、賢十倍と雖も、以て

功業を成すこと能わず。」とある<sup>(8)</sup>。筆者はかつて試みにこの「十全」を「十百」と校訂した<sup>(9)</sup>。當時は主に二つの問題について言及した。

一つは、比較的早い時代の文獻の中では、德行・才能などが完美であることを形容する際に、しばしば「全」が使用されているが、「十全」を使用している用例はないということである。先秦から前漢初期に至るまで、古書の中の「十全」は現代漢語の「百分之百」(百パーセント)の意味である。また、「百全」「万全」という語もあり、これらは現在の俗語で言う「万無一失」(万に一の失敗もない)のような意味である。『呂氏春秋』の「十全之賢」を「十全十美之賢徳」(完璧の賢徳である)と解釋しているのは、「盡善」「盡美」などの言い方の影響を受けたものであると考えられる。実際、先秦から前漢まで、「十全」にはこのような用法はない。もう一つは、高誘注によって理解すれば、文章の意味は非常に明瞭であることである。高誘注は、「もし殷の湯王が鄣を據点とせず、周の武王が岐を據点としなかったならば、たとえ十倍の賢徳があっても成功しがたい。」と言っており、これは君主の賢徳と國土の面積との関係について論じたものである。類似的表現は古書に多くあり、例えば『孟子』離婁篇・『戰國策』趙策・『說苑』正諫・『淮南子』汜論などに見える。

高誘の注釋は妥當であるが、古代漢語では、「全」にはもともと「倍」の意味がない。そのため、筆者は原文の「全」を「全一」、すなわち「百」の一種の六國古文の寫法と見なした。本文の「十全」はまさに「十百」であり、つまり現代漢語で言う十倍・百倍である。

『呂氏春秋』は秦朝建立の直前に編纂され、雑家の代表的な書物と

して後世に流傳し、また散佚の問題がなかった。呂不韋は無論のこと、呂氏の門客の中には六國出身の者もいる。呂氏門下の晉人については、『史記』秦始皇本紀(始皇帝十二年)などに明記されている。上述の「十全」は原書が編纂・抄寫された際にたまたま六國「古文」が使用され、その後、「今文」(秦漢隸書)に基づいて「全一」に書かれ、「全」字と混同したと考えられる。例えば「緇」の字は、戰國竹書は「𠄎」に作り(上博楚簡『緇衣』第一簡)、秦漢以降の「純」の寫法と近い。ゆえに鄭玄は『周禮』地官・媒氏の「純帛」、および『禮記』玉藻の「純組紱」の注において、この二つの「純」は「緇」に改めるべきであると指摘し、また「緇」の古文は「絲旁才」(糸偏に音符として才を加える)であり、「純」と混同されやすいとも述べている。漢代には「𠄎」は「純」と誤寫されており、「全一」が「全」と誤寫されていることと類似し、これは戰國時代の「古文異形」が隸書・楷書の段階に残ったものと言ってもよい。

以上、『呂氏春秋』の「十全」の検討について補足しつつ振り返った。當時、論證中に直面した最大の問題は、出土戰國書籍中に「全一」の用例が見られなかったことである。すでに指摘したように、戰國竹書の中には齊・魯・三晉から楚に傳來したと考えられるものが少なからずあった。書籍中には「百」字が常用されているが、「全一」と書かれているものは一例もなかった。しかし幸いにも、近年、清華簡『良臣』が發表され、楚地に流傳した書籍の中に「全一」の實例があることが初めて判明した。以下、清華簡の新資料を用いて「全一」に関する考察をさらに進めていきたい。

### 第三章 戰國竹書に見える「全1」の實例

清華簡第三分冊の『良臣』第八簡には、以下のように「史全1」という西周晩期の人物について言及されている（字形は、圖（4）参照）。

鄭桓公與周之遺老、史全（伯）・宦仲・號叔・杜伯、後出邦。

整理者は、その「全1」は「百」であり、「史全1」とは「史伯」、すなわち『漢書』古今人表に中上等として記されている西周末年の人物「太史伯陽」であると指摘している<sup>10)</sup>。

簡文では、この史伯を「周之遺老」と稱している。『國語』周語上や『史記』周本紀などでは、西周の太史伯陽は西周滅亡を豫言している。西周滅亡後、「史伯」は當然、「周之遺老」である。また、『史記』鄭世家には、西周の「太史伯」と鄭の桓公が鄭國封建の問題について議論していることが書かれている。『國語』鄭語にも、次のような記載がある。

（鄭）桓公爲司徒、甚得周衆與東土之人。問於史伯曰、「王室多故、余懼及焉。其何所以逃死。」

（鄭）桓公司徒と爲り、甚だ周の衆と東土の人とを得たり。史伯に問ひて曰く、「王室故多く、余及ばんことを懼る。其れ何所か以て死を逃るべき」と。

これによると、鄭の桓公の最初の封地は關中<sup>11)</sup>にあり、後に東遷して「濟洛河潁之間」に至っており、史伯の提案を採用している。簡文ではすでに「史百」と鄭の桓公の「出封」とは関係があることを述べており、具體的に指していることは、鄭の桓公がその提案を採用し、封地を關東に移し、宗周地區の動亂を避けた、ということであると考えられる。總合して見ると、整理者が「史全1」を「太史伯」と見なしているのは、完全に信用できる。

現在、出土戰國竹書の中には「人」に従い「白」に従う「伯」の字はなく、主に「白」と書かれるのみである。ただし、三晉地區の「全1」は、時には「伯」を表していることもある。例えば、趙の貨幣銘文中の地名「全1陽」は、『史記』趙世家に記すところの「伯陽」であり、<sup>12)</sup>『括地志』は相州鄴縣の西部、すなわち今の河南省安陽市の西北にあると言う。趙世家の「伯陽」は、ある版本では「伯」は「柏」に作る<sup>13)</sup>。その地名は、後世、「碧陽」とも稱される。「柏」「碧」はすべて「白」聲に従う。また、例えば、「十百」は「什伯」とも書かれる。王弼注本『老子』第八十章には「小國寡民。使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙（小國寡民、什伯の器有りて用ひざらしめ、民をして死を重んじて遠く徙らざらしむ）」とあり、その中の「什伯」は、馬王堆漢墓帛書『老子』の甲本・乙本では「十百」、北京大學藏西漢竹書『老子』では「什佰」に作る<sup>14)</sup>。これらの文獻の時代については、馬王堆帛書の甲本が最も早く、北大漢簡本はそれよりやや遅く、王弼注本は最も遅い。その字形については、「百」が最も早く、「佰」はやや遅く、「伯」が最も遅い。つまり「史百」が「史伯」と書かれてい

た時代はおそらくあまり早くないと考えられる。<sup>15)</sup>

また、『良臣』第十簡は鄭の子産の「輔」を列挙し、その中に「王子全」という者がいる（字形は、圖(5)参照)。整理者の注釋では、この「全」も「全1」であると見なして「百」と釋讀し、「王子百也應是王子氏、未見於傳世文獻(王子百も王子氏と考えられるが、傳世文獻には見られない)」と述べている。<sup>16)</sup>『左傳』には、「王子伯廖」「王子伯駢」といった名が見える。『良臣』第九簡・第十簡にはまた子産の「師」である「王子伯願」という人物が記されている。「王子百」は傳世文獻には見られない人物である。いずれにせよ、楚文字の「全」は「全・全」と書かれ、「全1」とは同じでないことから、この箇所も「王子全」であるはずがない。『良臣』の「全1」の寫法を根據に見ると、整理者の「王子百」に對する解釋は合理的であると考えられる。



本篇の第四簡には周の武王の臣下として「君爽」という人物が見え、「爽」は「𠄎」と書かれている。戰國文字(傳抄古文も含む)に見え「爽」の字形をまとめると、【表1】の通りである。

【表1】

「爽」			
	郭店『緇衣』	上博『緇衣』	八年呂不韋戈 <sup>18)</sup>
	郭店『成之聞之』		『汗簡』古文
(模寫) 			

郭店楚簡『緇衣』は典型的な楚文字であり、上博楚簡『緇衣』や郭店楚簡『成之聞之』は齊魯文字の風格が多く見られると認識されている。<sup>19)</sup>そして、戰國中晩期には、「爽」は、秦・楚では習慣として「百」に従って書かれ、三晉では「全1」に従って書かれ、齊魯では習慣として「目」に従って書かれている。「全1」と比べると、『良臣』の「爽」字が従うところの「全1」には中間に長い横棒がなく、楚文字の「全」の寫法と一致している。これは底本のままに書き寫されたものである可能性があり、あるいは底本がもと「全1」に作っており、抄寫が正確ではなかったという可能性もある。「爽」の寫法も「全1」が齊魯・秦・楚の慣用の字形ではなかったことを示しているのかもしれない。

清華簡の整理者や他の研究者の多くは、『良臣』は楚以外の諸侯國、特に三晉地方から傳來した文獻である可能性があると考えている。<sup>20)</sup>字形から見ると、ある學者は、三晉の韓との關係が最も密接であると

見なしている。内容から分析すると、述べられている周代の人物は鄭と關係する者が最も多い。東周時代、鄭は最終的に韓に併呑された。戦國時代の兵器の銘文にもその實證となるものがあり、韓はかつて自ら「鄭」と稱している<sup>(21)</sup>。このことから、『良臣』は韓から傳來した文獻であり、底本は韓の古文を用いて書寫されたものである可能性があると言えよう。

『良臣』は司法・行政文書とは明らかに異なり、さらに卜筮・喪葬文書でもなく、一種の古書である(四部分類法によると、史部に入れることができる)。本篇中の「全一」の用例は、三晉文字がかつて楚の領域内に流傳した書籍の用字に影響を與えていることを直接證明しており、秦で編纂された『呂氏春秋』の中に三晉文字の特殊な字形が存在するという筆者の推測に對して、有力な論據となると考えられる。

#### 第四章 『路史』中の疑似「全一」についての検討

前述の通り、傳世文獻と出土文獻の中には、「全一」と書かれる「百」がある。筆者は以前、『路史』陶唐氏紀の「以通刀布」の部分、すなわち「堯布文作上十全<sup>(22)</sup>……詳董譜」について言及した。「全」の下の文字については、『錢錄』はこれを引用して「少」に作り、「子」の字が倒れて書かれたものであると推測している<sup>(23)</sup>。『董譜』という書物は早くに失われて傳わらないが、宋代以來のその他の錢幣學の著作から知ることができ、いわゆる「堯布」とは、現在言うところの戦國時代の「布幣」(金屬貨幣の一つ)である。この点については、洪亮吉らがすでに指摘している(當時の習慣によって、洪氏は「全一」を「金」

と釋讀している)。筆者は拙稿「《呂氏春秋・慎勢》『十全』校釋」において、この「全」は「全一」である可能性があり、「百」と改めて讀むべきであると考えた<sup>(23)</sup>。現在振り返ってみると、この考えには修正が必要であろう。

『路史』が引用する貨幣文字は、参考にできる圖版が缺乏している(拓本や模寫もない)ことから、確定が難しい。『錢錄』の附圖は例(6)であり、貨幣上の文字を模寫したものはなく、直接楷書で釋文を書いている。(6)のこの種の模寫については、その來源が明らかではない。

#### 【『錢錄』の模寫】



(6)

(7)

(8)

#### 【『貨系』の拓本】



(9)

(10)

(11)

ただし、(7)と(10)すなわち『貨系』1355との間の字形の差異を通して、『路史』が引用する『錢譜』の戦國貨幣文字は、例(9)すなわち『貨系』1799の「平陰」の誤讀であると推測できる。左側の「陰」字は古文では「金」聲に従い、これは戦國文字によく見られ

る通假である。「全一」と書かれる「金」字の偏旁は、晉系文字に見られるだけでなく、燕の貨幣銘文中にも見られる（その例は、後文の【表2】参照）。（9）の左側の「金」偏は「全」字である可能性が非常に高い。「十」と見なしているのは、「阜」字の偏（β）の誤認であろう。右側の文字は頭頂部の横棒は見落とされており、「𠂔」あるいは「少」とも非常に近いために、「十全𠂔（或少）」という釋讀になったと考えられる。例（8）は、例（11）すなわち『貨系』1272のよな貨幣の模寫であると考えられ、後者の銘文は現在、一般的に「安邑二銖」と釋讀されている。「二銖」が『錢錄』中で「二斤全」と釋讀されているのは、一つの「全一」の偏旁がある字を、分解して二つの字として釋讀しており、これは「陰」字が分解されて「十全」の二字に誤認されたことと類似している。

總じて言うと、『路史』が引用する戰國貨幣文字の「十全」の「全」は、「全一」と書かれた「金」字の偏旁であるとすべきである。また、いわゆる「十全𠂔（或いは少）」は、「平陰」の二字の誤讀である可能性が高い。

## おわりに

「百」を「全一」と書くもので、すでに知られている最も早い例は、春秋戰國時代の王畿（今の河南省洛陽市を中心とする地方）と晉の西南（今の山西省西南部）に見える。例えば、韓の貨幣文字（すなわち上述の戰國早期から中期までに韓で流通していた銳角布の銘文「百涅」）は、言うまでもなく、いわゆる「晉系文字」である。<sup>24</sup> 韓・魏・

趙の他には、中山國の青銅器銘文の中にも用例がある。主な原因は、中山國は三晉の政治・經濟・文化交流と密接に關係があるからであり、「全一」の寫法の影響も比較的大きい。戰國時代に中山國は相次いで三晉の魏・趙の兩國に統治され、三晉文化を直接受け入れており、<sup>25</sup> 彼らが「全一」を受容したと考えても不思議ではない。

齊の刀幣銘文の中にも「全一」と書かれる「百」がある。この種の銘文は一般的に刀幣の背面に書かれており、その表面の銘文はしばしば「齊大刀」である。この種の刀幣の鑄造年代は戰國晚期であり、<sup>26</sup> 三晉地區で「全一」を初めて使用した時期よりかなり遅い。齊と趙・中山國とは近鄰であり、往來も多く、齊系文字中に「全一」が用いられているのは、三晉から傳來したものとも考えられる。

このほか、「金」字も「全一」と書かれている。これは東周の空首布の銘文に初めて見え、晉が三家に分かれた後も、みなこの寫法を踏襲した。また、三晉の擴張・遷移の中で、しだいにその他の地域まで影響を與えていった。例えば、趙の近鄰である燕では、晩期の刀幣銘文の「外虛」の「虛」について、<sup>27</sup> 以下の【表2】のような二種の寫法が見える。

【表2】

従「全1」	従「金」
 『貨系』 3019)	 『貨系』 3018)
 『貨系』 3035)	 『貨系』 3032)

當然、この種の現象と三晉文字に見える「金」字の偏旁とは同じではない。燕系文字の中では、「全1」と書かれる「金」字の偏旁は音を表しているのではない。また、三晉文字の中で、例えば前掲の例(9)の「陰」と釋讀されている字は、明らかに「金」を音符としている。これは燕系文字にも「全1」を全面的に受容しているものがないことを表している可能性がある。

楚・秦などの地では、「全1」の受容の程度が一層低い。現在までのところ、非書籍類の楚系・秦系文字資料の中にこのような字形は確認されていない。

春秋戰國時代の各諸侯國が書籍中にこの種の字形を使用していたかどうかについては、資料が不足しているために斷言しがたい。しかし、「𠄎」字が従うところの「百」字の偏旁の寫法から見れば、燕や齊などの地の書籍中に「全1」を大規模に使用しているという可能性はおそらく高くない。

「全1」の流傳の狀況から見れば、この種の非常に特殊な古文の「異形」について、秦・楚兩地は明らかに影響を受けていないだけでなく、燕・齊諸國でも長い時を経て受容し、その受容の程度も高くない。このことは、なぜ秦王朝が短期間に六國古文を廢除できたのかという点について解明の一助となるであろう。また、清華簡「良臣」のような實例があっても、秦・楚などの地の出土書籍簡中に大量に「全1」の字形が使用されているはずであると推測するのは難しい。『路史』の「全1」は完全に文字の誤讀であり、『呂氏春秋』の例は、たとえ確實に「全1」と書くべきであるとしても、ただ六國文字の影響を受けて出現した特殊な狀況であると見なすことができるだけである。

現在の問題は、晉系文字の「全1」の字形の來源(造字の根據)は何であるのかということであり、これについてはまだ明確な答えを出したい。また、「金」字の偏旁と「百」はすべて「全1」と書かれるが、どちらの寫法が先に出現したのか、兩者にはどのような繋がりがあるのかという点については、今後さらに研究を進めていきたい。<sup>28)</sup>

注

- (1) 朱德熙「秦始皇「書同文字」の歴史作用」(もと『文物』一九七三年第一期、ここでは同著者の『朱德熙文集』第五卷(商務印書館、一九九九年九月、七三〜八二頁)による)、裘錫圭『文字學概要』(商務印書館、二〇一二年、五七頁)。
- (2) 李學勤「秦簡的古文字學考察」、中華書局編輯部『雲夢秦簡研究』收錄、中華書局、一九八一年七月、三四〇頁。湖南省博物館・復旦大學出土文獻與古文字研究中心『長沙馬王堆漢墓簡帛集成(五)』、中華書局、二〇一四年六月、六六頁。趙平安『隸變研究』、河北大學出版社、一九九三年、一五〜一八頁。周波『戰國時代各系文字間的用字差異現象研究』、復旦大

- 學博士論文、二〇〇八年四月。
- (3) 王國維「史籀篇疏證序」・「桐鄉徐氏印譜序」・「戰國時秦用籀文六國用古文說」(『觀堂集林』第五卷・第六卷・第七卷) 参照。漢代の學者が言うところの「古文」については、張富海『漢人所謂古文之研究』(錢裝書局、二〇〇七年五月) 参照。
- (4) 何琳儀『戰國古文字典—戰國文字聲系』、中華書局、二〇〇四年、六〇三—六〇四頁。吳良寶『先秦貨幣文字編』、福建人民出版社、二〇〇六年三月、四八—四九頁。
- (5) 林巴奈夫「戰國時代の重量單位」、『史林』第五一卷第二號、一九六八年、一〇九—一一頁。王毓銓氏の見解は彼の著作『我國古代貨幣的起源和發展』に見え、林氏の文中にすでに引用されている。本書には修訂本があり、『中國古代貨幣的起源和發展』、中國社會科學出版社、一九九〇年二月)、また『王毓銓史論集』第一卷(中華書局、二〇〇五年八月)にも収録されている。
- (6) 河北省文物管理處「河北省平山縣戰國時期中山國墓葬發掘簡報」、『文物』一九七九年第一期、五頁。紹介によると、釋文・執筆に參與した學者として李學勤氏・朱德熙氏・裘錫圭氏・張頌氏・商承祚氏がいる。
- (7) 李學勤「平山墓葬羣與中山國的文化」(『文物』一九七九年第一期、三八頁)、張政烺「中山國胤嗣好盜壺釋文」(『古文字研究』第一輯、中華書局、一九七九年版、二三五頁)、湯餘惠「關於全字的再探討」(『古文字研究』第一輯、中華書局、一九八九年版、二一八—二二二頁) 参照。
- (8) 許維適撰、梁運華整理『呂氏春秋集釋』第一七卷「慎勢」、中華書局、二〇一〇年版、四六二頁。陳奇猷『呂氏春秋校釋』、學林出版社、一九八四年版、一一〇九頁・一一一五頁。
- (9) 曹方向『呂氏春秋・慎勢』「十全」校釋、『古籍研究』第五七一—五八卷、二〇一三年。
- (10) 李學勤主編『清華大學藏戰國楚簡(參)』(中西書局、二〇一二年、一六一—頁四三)、『梁玉繩』『史記漢書諸表訂補十種』(中華書局、一九八二年、六一—頁) 参照。
- (11) 鄭が初めて封ぜられた具體的な場所については、學者の間で意見が異なるが、いずれにせよ關中にあつたと考えられる。本論文の主題とはあまり關係がないため、ここでは詳細は割愛する。
- (12) 何琳儀『戰國古文字典—戰國文字聲系』、六〇四頁。
- (13) 瀧川龜太郎『史記會注考證』、藝文印書館、一九七二年、六八八頁。
- (14) 湖南省博物館・復旦大學出土文獻與古文字研究中心「老子甲本」、『長沙馬王堆漢墓簡帛集成(肆)』、中華書局、二〇一四年六月、三四頁。
- (15) このほか、古代の呼稱の一般的な習慣によると、「太史」は職位であり、その後ろに名や字を續ける。そのため、「史伯」は名が「百」で字が「陽」である可能性があり、長幼の順序の「伯」字を加えて「伯陽」と稱し、職名を加えて「太史伯陽」と稱している。司馬遷は『史記』周本紀において『國語』周語の「伯陽父」を改めて「太史伯陽」とし、鄭世家では『國語』鄭語の「史伯」を「太史伯」としており、前後が不統一であり、さらに「太史伯」の呼稱自体にも問題がある。鄭世家は一字を誤脱しているのかもしれない。唐宋以降、「太史伯陽」の名は「穎」、字は「碩父」と言われるようになるが、少なくとも『國語』や『史記』の中にはその論據が見つからず、信じるのができない。
- (16) 李學勤主編『清華大學藏戰國楚簡(參)』、中西書局、二〇一二年、一六二頁注五六。
- (17) 二字の中間に見えるのは編痕であり、文字の筆劃ではない。
- (18) 李仲操「八年呂不韋戈考」、『文物』一九七九年第一二期。銘文は『殷周金文集成』11861に収録。比較的是っきりとした器物の形と銘文については、吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』第三二冊、編號17259参照。
- (19) 周鳳五「郭店竹簡的形式特徵及其分類意義」、『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月、五三—六三頁。林素清「郭店、上博《緇衣》簡之比較—兼論戰國文字的國別問題」、『新出土文獻與古代文明研究』、上海大學出版社、二〇〇四年四月、八三—九六頁。『成之聞之』については、周氏はその字形は典型的な楚文字ではなく、魏の三體石經の古文に非常に近いと見なしている。馮勝君氏は、『說文解字』の古文と魏の三體石經の古文とは、いずれも齊系文字であると明確に指摘している(『郭店簡與上博簡對比研究』、錢裝書局、二〇〇七年五月)。
- (20) 劉剛「清華參《良臣》爲具有晉系文字風格的抄本補證」、復旦大學出土文獻與古文字研究中心網、二〇一三年一月一日。楊蒙生「清華(參)良臣簡管見」、『深圳大學學報(人文社會科學版)』二〇一四年第二期。福田哲「一戰國簡牘文字の書法樣式に關する試論—清華簡《良臣》・《祝辭》の文字と書法—」、第五六回中國出土文獻研究會、二〇一四年一月二日—二六・二七日(後に、『清華簡《良臣》・《祝辭》』の書寫者—國別問題再考)として『中國研究集刊』第六二號(二〇一六年六月)に収録。
- (21) 李學勤「戰國題銘概述(中)」、『文物』一九五九年第八期、六〇頁。
- (22) (宋) 羅泌『路史』、中華書局四部備要本、一二二頁下欄。(清) 梁詩正・于敏中『錢錄』第一卷、天津古籍書店、一九八九年一月、一〇頁。
- (23) (清) 洪亮吉が著した『古泉釋文』には魏國の橋形布の釋文「梁之尚金

「當守」がある（現在では一般的に「梁正幣百當守」と釋讀する）。『古泉釋文』は筆者は未見であり、ここでは吳良寶『中國東周金屬貨幣研究』一四七頁によった。

(24) 晉系文字は東周時代の東周公國・西周公國の文字を含む。何琳儀『戰國文字通論訂補』第三章第四節、江蘇教育出版社、二〇〇三年一月、一一五頁、一三七～一四四頁參照。

(25) 李學勤『平山墓葬羣與中山國的文化』、『文物』一九七九年第一期、三七～四一頁。何琳儀『戰國文字通論訂補』、一三四～一三七頁。

(26) さらに具體的に言うと、「齊大刀」の金屬の成分と齊國晚期の圓錢の成分とは同じである。吳良寶氏の分析によると、齊の圓錢の鑄造年代は齊王建（在位、前二六四～前二二一年）の時期に當たる（吳良寶『中國東周時期金屬貨幣研究』、一〇九～一一〇頁、二六七～二六八頁）。

(27) 燕侯載錫銘文（『殷周金文集成』10583）に「鼓」とあり、學者は「百鼓」あるいは「金鼓」と釋讀している。「金鼓」という釋讀は、比較的信用できる。「鼓」の前の字は、三つの横棒の間の距離が明らかに不均等であり、必ずしも本論で言うところの「全1」字ではないと考えられる。

(28) 「全1」と「百」の関係については、漢字學研究會の村上幸造教授（大阪工業大學）より直接ご教示を賜り、古文字の「百」と「全1」は傳統的な六書の理論中の「轉注」の関係ではないかとのこと意見をいただいた。この点についても、今後さらに検討していきたい。

【附記】

本稿は、二〇一五年一月九日に開催された「中國出土文獻研究會主催特別講演會」〔漢字學研究會・中國古算書研究會共催、於大阪大學文學部中庭會議室〕において發表した内容に修訂を加え、定稿としたものである。講演會では、福田哲之教授（島根大學）、佐藤將之教授（國立臺灣大學）、大川俊隆教授（大阪産業大學）をはじめとする諸先生方より貴重なご意見・ご教示を賜った。また、日本語翻譯の際には、草野友子博士（京都産業大學）の助力を得た。講演會での發表の機会を與えてくださった湯淺邦弘教授（大阪大學）、ならびに關係者各位に對し、この場をお借りして感謝申し上げます。

本研究は、日本學術振興會科學研究費補助金・特別研究員奨勵費（JSPS KAKENHI Grant Number 26・04302）、中國教育部青年基金項目（15YJC770003）および漢語海外傳播河南省協同創新中心の助成を受けたものである。

（日本學術振興會外國人特別研究員・安陽師範學院文學院講師）